Etro

Richard james

Etro

2016年春夏のメンズウェアファッションショーで、私たちは実に興味深いトレンドを目撃した。“マッチョ”ルックは時代遅れになり、男性のワードローブは、洗練されたテーラリングとより女性的な美的感覚に影響を受けた、“新しいダンディズム”へ向かっている。その結果生まれたのは、新しいエレガンスのかたち。例を挙げれば、ボウタイや花柄が付いた繊細なブラウス、上質の生地で作られたベスト、サスペンダー、パナマ帽、クールなプリントを施したダブルブレストのジャケットなどだ。この“ダンディー”のスタイルはもちろん、伝統的に言って休暇やレジャーのアクティビティを追求する姿を強調するものだが、これらの美しい服たちは、最近のシーズンで見られた耐摩耗性の美学からは距離を置いている。

これは、スコット・フィッツジェラルドによる『華麗なるギャッツビー』の1920年代の雰囲気や、さらにはオスカー・ワイルドの作品など様々なものからインスピレーションを得た、新しい着こなしだ。コレクションの中には、ある種のロマンティックなタッチがみられる一方で、より未来的で確固とした土台に基づく、つまりサヴィル・ロウの美しい店内で見られるような最高級のクラシックな気品も含まれている。これは、隙のないエレガンスや、非の打ち所のない細かさではなく、コントラストのハーモニーを求める旅なのだ。例えば**エトロ**ではコレクション全体を通して、ウィメンズウェアでこれまで使われてきたような素材を用いた、新しいダンディーなスタイルを提案していた。スーツの下に身につけたシフォン地のシャツには、ウォーターメロン、タンジェリン、バーガンディー、ブルーなどの柔らかな色合いが使われていた。レザージャケットはよりソフトになり、白いシルクのジャカード織りのシャツとコーディネートされていた。フェミニズムの影響は引き続き**グッチ**にも見られ、アレッサンドロ・ミケーレが、襟元にボウタイをつけたピンクのブラウスや、クロッシェ編みのアイテム、シルクのローブなどを披露した。**マッシモ・レベッキ**は、ドット柄のデニム地のスーツに花柄のシャツ、繊細なプリント柄が絶妙なベストのコーディネートを提案した一方で、**リチャード・ジェームス**は、美しいプリントをあしらった鮮やかな色合いのスーツで人々の目を釘付けにしていた。**ホーガン**でデザイナーを務めるサイモン・ホロウェイは、マイクロプリントのブラウスと大きな折り返しがついたスーツで、ポップでラグジュアリーなテーラリングを提案した。